ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

目　次

●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
開館から 25 周年を迎える資料館／登録博物館として認定される／開館 25 周年記念特別展「ひめゆりの証言員たち」開催準備中／第 20 回日本平和博物館会議に出席／企画展「絵で見るひめゆりの証言」を開催／ 2013 年度ひめゆりガイド講習会を開催／米コネチカット大学生が来館／入館料改定のお知らせ
●2014（平成 26）年度のイベント・事業・・・・・・ 6
●コラム　相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
●統計に見る 2013 年度・・・・・・・・・・・・・・・・・7
●研究ノート⑦　宮良ルリ「文教学校ノート」について・・9
●仲宗根政善日記抄（49）・・・・・・・・・・・・・・11
●本棚（仲程昌徳）　・・・・・・・・・・・・・・・・13
●声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
●資料館の動き（2013 年度）・・・・・・・・・・・14
●資料館ガイド　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第53号
2014.5.31

資料館トピックス

◆開館から 25 周年を迎える資料館

ひめゆり平和祈念資料館は今年の 6 月 23 日に開館 25 周年を迎えます。多くの皆さまにお越しいただき、この夏には入館者が 2000 万人に達する見込みです。また、年間 2300 余の学校団体が修学旅行等で訪れ、平和学習の場となっています。これも、当館に関心を寄せ、応援してくださる皆さまのおかげと感謝いたしております。

開館以来、元ひめゆり学徒は「証言員」として展示室に立ち、来館者に直接、戦争体験を伝えてきました。また、企画展の開催、戦跡めぐりなどイベントの実施、刊行物の編集など、職員と一緒にさまざまな業務を担ってきました。最近では、小学校低学年の子どもたちにも理解してほしいと、『絵本 ひめゆり』やアニメ「ひめゆり」も制作しました。

当館は、これからも沖縄戦の実相と命と平和の大切さを発信してまいります。今後とも、皆さまのご支援とご協力をお願いいたします。

◆登録博物館として認定される

ひめゆり平和祈念資料館が 2014 年 3 月 19 日づけで登録博物館となりました。登録博物館とは、博物館法に基づき、都道府県教育委員会が所蔵資料や土地建物、実施事業、学芸員の数、開館日数などについて審査し、一定の基準を満たしていれば、公的に博物館として登録するというシステムです。

沖縄県内には 77 の博物館・水族館・植物園がありますが、そのうち登録博物館は、8 館（沖縄県立博物館・美術館、沖縄美ら海水族館、名護博物館、浦添市美術館、那覇市立壺屋焼物博物館、久米島博物館、宮古島市総合博物館、石垣市立八重山博物館）です。今回、当館と同じように登録博物館になった館が 2 館（沖縄市立郷土博物館、宜野湾市立博物館）あり、2014 年 3 月現在では 11 館が登録博物館となっています。

当館では、登録博物館になったことを契機に、施設や事業をますます充実させていきたいと考えています。

◆開館 25 周年記念特別展「ひめゆりの証言員たち」開催準備中

開館 25 周年を記念して、証言員（元ひめゆり学徒）の活動に焦点を当てた特別展を開催します。

戦後 40 年近くが経った 1982 年、ひめゆり同窓会は、亡き学徒の鎮魂と戦争の悲惨さを後世に伝えるために、平和資料館の建設を決意し、資料館づくりに取り組みました。7 年後の 1989 年 6 月 23 日、ひめゆり平和祈念資料館が開館しました。

開館と同時に、元ひめゆり学徒は証言員として、展示室で来館者への説明を始めます。悲惨な戦争を体験し、多くの学友を亡くした生存者にとって、戦場での体験を思い出すのはとてもつらいことでした。それでも、戦争の悲惨さを伝えることが亡き学友の鎮魂になると信じて語り続けてきたのです。また、企画展やイベントの計画・実施、所蔵資料の整理保存、次世代継承への取り組みなど、資料館のあらゆる仕事に携わり、運営の中心となってきました。

証言員たちの軌跡をたどる今回の特別展が、ひめゆり平和祈念資料館の原点について考える機会になればと考えております。

現在、開催に向けて準備中です。新しく制作した証言映像も上映いたします。また記念イベントとして、「ひめゆりの心を未来へつなぐ―映像上映とトーク―」も開催する予定です。多くの皆様のご来場をお待ちしております。

証言員の活動の様子

◆第 20 回日本平和博物館会議に出席

2013 年 11 月 7 日・8 日の 2 日間、埼玉県で開催された「第 20 回日本平和博物館会議」（開催館・埼玉県立平和資料館）に、館長の島袋淑子と学芸課長の普天間朝佳が出席しました。本会議は、年に 1 回国内の主要な平和博物館 10 館が集まり、館運営や館同士の協力・連携について話し合う会議です。

会議の協議事項は、「1. 2015 年・戦後 70 年記念の共同事業の提案について」、「2. 今後の加盟館増加への展望について」の 2 つでした。協議題 1 については、提案館の立命館国際平和ミュージアムから、①各館が実施する事業に「日本平和博物館会議協賛

第 20 回平和博物館会議

事業」という冠をつける、②各館から「我が館のこの１点」という資料を出し合い巡回展をする、③各館紹介のパネル展の巡回展をする、④平和のための博物館国際ネットワーク議長のピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏のメッセージをパネルにし、各館で展示する、などのアイデアが提示されました。この会議では結論がでず、今後各館で検討していくことになりました。協議題２については、加盟したいという申し出があった場合には、「申し合わせ」規約に従って検討することで一致しました。会議後、埼玉県立平和資料館、丸木美術館の見学を行いました。

◆企画展「絵で見るひめゆりの証言」を開催

昨年 12 月 16 日より 2013 年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」を第６展示室で開催しています。資料館はこれまで、言葉だけでは想像しにくい戦争体験を伝えるために、絵本やアニメを制作してきました。その経験を生かして、証言員として活動してきたひめゆり学徒 16 人の戦争体験を絵にしました。『絵本 ひめゆり』の三田圭介さん、アニメ「ひめゆり」の海津研さんに絵を担当していただきました。企画展では、証言員一人ひとりの絵 16 点、下絵 37 点、話すのがつらい体験などについてパネルで紹介しています。

会場に設置した企画展のアンケートには、2014 年３月 31 日までに 1,167 件の感想をお寄せいただきました。そのうちの一部を紹介いたします。

企画展アンケートに寄せられた感想（抜粋）

・わたしたちは、今、水ものめて、それがあたりまえだと思っていたけど、せんそうに出ていた人は、のめなくてすごくかわいそうです。あと学生で、死んでしまっているのが本当～にかわいそすぎます。食べ物もなくて貝をなめていたそうなのでかわいそうです。（10 歳女性）

・「絵で見るひめゆりの証言」では、たくさんの絵があって、見ると戦場のかこくさがつたわってくるので、戦争をしている時は、すごくたいへんだったのが分かりました。ぼくは、命を大切にしたいです。（11 歳男性）

・洞窟の中で、いつ殺されるのかとみんなが手を合わせている絵が印象に残りました。あの時のみんなの恐怖感がとても伝わってきました。（16 歳男性）

・「殺して下さい」と頼む、「こんなところで死にたくない」。死なずして良い人が死ななければいけない。悲しくなりました。こんなことが２度と起きないようにしなければと思いました。（25 歳女性）

・証言の中に自分が置いてきてしまった友人の事をどうしても話せない、という人が居た事が強く印象に残りました。戦争が終わった今でも苦しんでいる人が居る現実に心が痛みます。改めて戦争を二度と起こしてはならないという気にさせられました。（27 歳男性）

・どの絵もその当時の様子を具体的に感じる事ができ、絵で見る事（視覚化）する事で、文字を読むだけでないリアルさがありました。そうした中でも、親友や友達が亡くなった時の事を話せないというのは、今までも戦争はまだその体験者の方達にとっては、遠い記憶なんかではけっしてなく、生々しく心に刻まれた深い傷となって、今も苦しんでおられることを痛感しました。たくさんの人、特に子供や若い人達にたくさん来館してほしいと思います。（40 歳女性）

・悲痛な叫び声、砲弾の音が聞こえて…きた。余りにもむごたらしい戦争の大きなキズ跡に声も出ない。（73 歳男性）

企画展についての話し合い（証言員会）

オープニング・セレモニー

企画展会場の様子

絵の前で足を止めるご家族

◆ 2013 年度ひめゆりガイド講習会を開催

日ごろ沖縄戦を伝える活動に携わっているみなさまを対象に、「2013 年度ひめゆりガイド講習会」を開催しました。6 年目となる今年度は 2 回に分け、2014 年 1 月 20 日はボランティアガイド・学生ガイドを対象に、2 月 7 日はバスガイド・タクシー乗務員を対象に実施しました。今年初めて参加する団体もあり、両日合わせて 49 人の参加がありました。

第 1 部の「ひめゆり平和祈念資料館とひめゆりの塔ガイドツアー」では、7、8 人ほどのグループに分かれ、当館の学芸員、説明員のガイドで展示室と塔周辺を巡りました。展示には書かれていない実物資料の情報、誤解されやすい点の説明を行い、参加者からの質問にこたえるなどしました。第 2 部では、「証言員（元ひめゆり学徒）との質疑応答」を行いました。参加者からは、「手榴弾は軍から手渡されていたのか」、「戦中、戦後と教育がどのように変わったと思うか」、「映画「ひめゆりの塔」を事前学習で視聴する学校が多いが、映画は体験とどのように異なるのか」といった質問が出され、証言員がそれぞれの体験をまじえて答えました。

参加者からは、「実際に話をきいて勉強するとさらに案内しやすくなる」、「どんな伝え方をすれば戦争の恐ろしさがわかっていただけるか考えさせられた」、「若い人達がしっかり案内しているのが大変たのもしく思いました」といった感想が寄せられました。

参加者からの質問に答える証言員

ガイドツアーを行う説明員

◆米コネチカット大学生が来館

2014 年 3 月 18 日、アメリカのコネチカット大学で戦後日本史、文化について研究している学生 13 人と渡辺健教授が当館を訪れ、与那覇百子証言員の戦争体験に熱心に耳を傾けました。国際交流基金の補助による沖縄スタディツアーの一環でした。その後、渡辺教授から「学生たちは、ひめゆり平和祈念資料館の訪問が、沖縄の旅の一番忘れられない、印象的な経験だったと繰り返し言っています」とのメールが届きました。これからも、世界中の若者が訪れてくれることを願っています。

コネチカット大学生と与那覇百子証言員

◆入館料改定のお知らせ

当館ではこれまで入館料を改定せずに運営してきましたが、消費税率の引き上げに伴い、4 月 1 日より入館料を下記のとおり改定させていただきました。ご理解いただきますようよろしくお願いします。

●個人

大　　人		高　　校　　生		小　・　中　学　生	
改　定　前	改　定　後	改　定　前	改　定　後	改　定　前	改　定　後
300 円	310 円	200 円	210 円	100 円	110 円

・障害者とその介護者各 1 名は無料です。入館の際に障害者手帳等をご提示ください。

●団体料金（20 名以上）

大　　人		高　　校　　生		小　・　中　学　生	
改　定　前	改　定　後	改　定　前	改　定　後	改　定　前	改　定　後
270 円	280 円	180 円	190 円	90 円	100 円

2014（平成 26）年度のイベント・事業

当財団では、今年度、下記のイベント・事業を計画しています。

○イベント

＊開館 25 周年記念特別展「ひめゆりの証言員たち」
＊開館 25 周年記念イベント「ひめゆりの心を未来へつなぐ―映像上映とトーク―」
＊夏休み元ひめゆり学徒の戦争体験講話
＊ひめゆりの映像上映と説明員トーク
＊ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会（8 月 15 日）
＊ 2014 年度ひめゆりガイド講習会
＊アニメ「ひめゆり」上映会

○事業

＊元ひめゆり学徒の戦争体験講話事業
＊ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行（2014 年 6 月 23 日）
＊出版
『感想文集ひめゆり』第 25 号、『年報』第 25 号、「資料館だより」第 53 号、「資料館だより」第 54 号の発行。
＊ひめゆり関連戦跡壕の調査
＊平和研究所基本構想づくり

相思樹

来館者一人ひとりと向き合うように

説明員　宮城奈々

私が説明員になって約一年が過ぎました。初めは相手に話し掛けることにもためらいがちでしたし、未だに上手く説明出来ずに反省することも多いです。

資料館には毎日たくさんの来館者が訪れます。年代、性別もバラバラで、興味の度合いもそれぞれ違います。足早に去って行く方もいますが、熱心に耳を傾けてくれる方も多く、中には質問を投げかけてくれる方や、自分の感想を話してくれる方もいます。

この人はどういうことを知りたいのだろう、どうすれば相手により興味を持って展示を見てもらえるだろう。展示室に立つときには、出来るだけ来館者一人ひとりと向き合うように心がけています。

また、「自分も空襲を経験した」など自らの体験を語って下さる方もおり、そんな時は積極的に耳を傾けるようにしています。説明するだけでなく、来館者の話や思いを受け取ることも説明員の大事な役割だと思うからです。

来館者と話をしていると、明らかに表情が変わることがあります。私のつたない話を聞き逃すまいとする真剣な顔に、伝わっていることを実感し、自然と説明にも熱が入ります。話を終えて「ありがとうございます」と声を掛けてもらうとやはり嬉しく、やりがいを感じる瞬間でもあります。

体験者の体験、思いを一度に全て伝えることは難しいことではありますが、私の話をきっかけに、来館者が少しでも戦争や平和について考えてくれたら。そして資料館に来て良かったと思ってもらえるよう、一人でも多くの人に伝えていければと思います。

統計に見る２０１３年度

1．総入館者状況（入館料免除を除く）

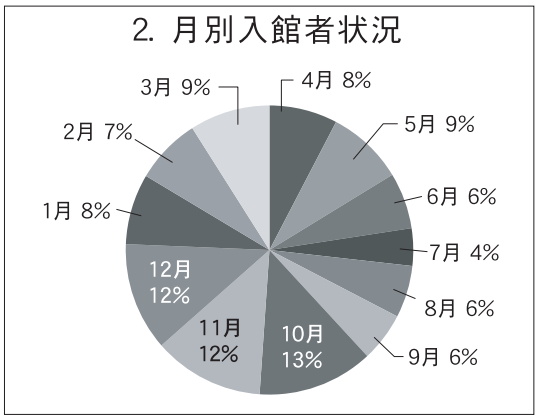
・昨年の入館者は 660,374 人（前年の 662,956 人より 2,582 人減少）。1 か月の平均入館者は 55,031 人、1 日平均は 1,814 人（慰霊の日を除く 364 日）。うち外国人は 5,296 人。
　→開館以来 25 年間で　23 番目の入館者数。

・開館以来 25 年間の累計は 19,801,496 人で、年平均入館者数は 792,060 人、1 日平均は 2,204 人（ただし、1989 年度の開館期間は 9 か月間）

2. 月別入館者状況

・昨年 1 年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの 10 月～ 12 月の 3 か月間。3 か月間の合計は 247,648 人で、総入館者数の 38%（小数点以下を四捨五入。以下同じ）。

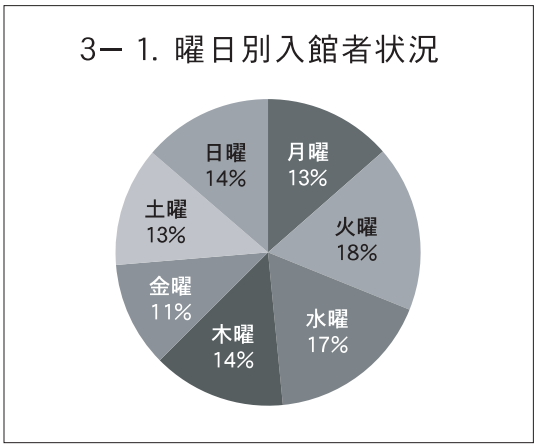
・入館者数が少ない時期は 7 月～ 9 月。3 か月間の合計は 102,951 人で、総入館者数の 16%。

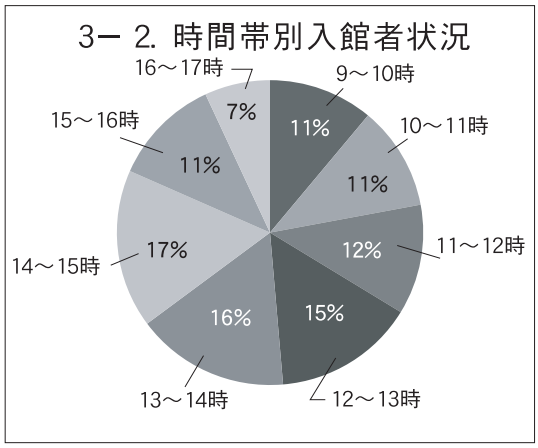


3 － 1. 曜日別入館者状況／ 3 － 2. 時間帯別入館者状況

・曜日別では、週半ばの火・水に集中している。
　曜日別：月 13%、火 18%、水 17%、木 14%、金 11%、土 13%、日 14%。

・時間帯では、12 時台から 14 時台までの午後の早い時間帯が少し多い。



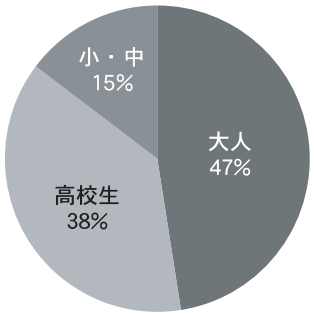


4.　類別入館者数

【総数】入館者の割合は、大人が 47％、高校生 38％（そのうち 98％が団体で入館）、小・中学生 15％（そのうち 73％が団体で入館）。25 年間の平均では、大人が 66％、高校生 23％（そのうち 95％が団体で入館）、小・中学生 11％（そのうち 64％が団体で入館）。

【団体】団体の割合では、特に高校生の割合が 68％と高く、次いで小・中学生 20％、大人 12％となっている。

4. 類別入館者状況（個人・団体含む）



5.　学校団体の入館状況

・昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2,242 校、317,554 人（前年の 2,251 校、306,813 人に比べ－ 9 校、＋ 10,741 人）。内訳は、小学校が 92 校で 4％、中学校が 722 校で 32％、高校が 1,428 校で 64％。

【地域別】

・全体では、関東 34％、近畿 15％が多い。
・小学校は、沖縄 52％、九州 19％、関東 13％の順に多い（前年は沖縄 53％、九州 23％、関東 12％）。
・中学校は近畿 34％、中国 17％、九州 14％の順に多い（前年は近畿 33％、中国 19％、九州 15％）。
・高校は関東 50％、東海 17％、信越 7％の順に多い（前年は関東 48％、東海 17％、信越 7％）。

【都道府県別】

・小学校　沖縄 48 校、鹿児島 17 校、東京 5 校の順に多い。
・中学校　兵庫 80 校、大阪 78 校、岡山 77 校、徳島 49 校の順に多い。
・高校　東京 195 校、神奈川 133 校、茨城 88 校、埼玉 86 校の順に多い。
・沖縄の中学・高校の全体に占める割合は、それぞれ中学 3％、高校 0.4％

【月別】

・10 月 20％、11 月 17％、12 月 17％、5 月 11％の順に多く、4 か月間で全体の 65％を占める。
・小学校　6 月 27％、11 月 23％、5 月 14％の順に多い。
・中学校　5 月 44％、6 月 16％、4 月 15％の順に多い。
・高校　10 月 25％、11 月 21％、12 月 20％の順に多く、3 か月間で全体の 66％を占める。

6.　入館料免除

入館料免除総数　38,040 人

・団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む）	170 団体／	8,025 人
・学校団体引率者		21,965 人
・修学旅行下見	646 校　／	1,466 人
・個人免除者（身障者手帳等提示の方）		2,840 人
・慰霊の日（6 月 23 日）		3,744 人

※沖縄県内学校団体は、入館料免除となるため、総入館者数には含まれない。ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。

ひめゆり研究ノート⑦

宮良ルリ「文教学校ノート」について

はじめに

生きた生甲斐　それを考へ
自分の考へをきりかへ　人格の錬磨にあたる

沖縄戦の翌年、1946 年 1 月に沖縄文教学校 1 期生として入学した宮良ルリさんがノートに書き取った言葉の一つである。このノートの原本は失われているが、朝日新聞社・沖縄タイムス社共催「ひめゆりの乙女たち展」(1980 年) に関わった土岐島雄氏が手書きで写したものが残されている。[1] この資料は 2011 年 6 月、東京大空襲・戦災資料センターによって当館に寄贈された。沖縄の戦後教育史を知る貴重な手がかりとして、その一部を紹介しておきたい。

1．沖縄文教学校とは

1946 年 1 月、米軍によって具志川村田場（現うるま市田場）に創立された沖縄文教学校は、戦後最初の教員養成機関であった。終戦直後の沖縄は、深刻な教員不足となっており、早急に教員を養成する必要があった。沖縄戦によって多くの教員を失ったうえ、薄給で生活できず教員をやめる人が続出したのである。

当初は、師範部、外語部、農林部の三部からなっていたが、まもなく外語部、農林部は分離独立した。師範部は、小学校教員の養成が目的で、1 期生は 102 人（男子部 51 人・女子部 51 人)、修業年限は 1946 年 1 月 10 日から 3 月 16 日までの 2 ヵ月間。女子部 51 人中 42 人が元の女師・一高女生で、そのうち 29 人はひめゆり学徒隊の生存者だった。[2]

2．講演のメモ

宮良さんのノートの 2 ページ目に「人道教育」と題するメモがある。少し長いが引用する。

◎目標をもって生活する

◎自分の人生観は思索によって生れる

人道教育を眼目とすると国境はなく、一等国民としての■■■■をおとしてはならぬ。何時までも優秀国民であった事を忘れてはならぬ。

・戦争には負けたが民族としては決して負けてはいない　我々は民族として最高である

時代といふのをしっかり見つめて互いにしさくを■らしていかねばならぬ　尊い血であることをにんしきしなければならぬ　戦争にまけて国家的地位は下ったが民族としては負けていない　それをしっかり自覚して生き抜く

青年期の目標をうしなっている若い力やみのある人達の為　生きがひのある人生だという事を感じさせる為の学校

郷土をもっとにんしきさせてその郷土の上に立って米国を見、外国を見て又郷土を見る

自分の人生観をしっかりかく立してその上に外国を見ていく

米国を理解せんための英語である。他人を見る為におこったのである　米国に随順するのではない

この後に 1 月 13 日付の記述があるので、これは、入学式（1 月 10 日）の頃に、校長が行った講演のメモではないだろうか。

講演者はまず、「一等国民」「優秀国民」という国家主義的な言葉を繰り返した後、「戦争には負けたが民族としては負けてはいない」と学生を力

師範部 1 期生（女子部）の授業風景

づけ、それを自覚して生き抜くことを求めている。さらに、文教学校を、目標を失っている若者たちに「生きがひのある人生だという事を感じさせる為の学校」と位置づけ、郷土と外国を見て、自分の人生観を確立するようにと訴えている。

師範部の学生は、師範学校予科修了者、旧制中等学校の卒業者であった。沖縄戦で男女学徒隊に動員されて、かろうじて生き残った者や、家族や学友を失った者が多かった。敗戦によって、「日本は必ず勝つ」という信念は打ち砕かれ、「米軍の捕虜になると虐待されて殺される」という宣伝が嘘であったことを知る。

ひめゆり学徒隊として沖縄陸軍病院に動員された宮良さんは、伊原第三外科壕などで多くの学友を失い、「自分だけ生き残ってしまった」という思いに苦しんでいた。

冒頭の「生きた生き甲斐…」という言葉は、この講演と一連のページに書かれている。生き残った者としての「生き甲斐」を考え、考えを切り替えて、人格を磨いていくこと。それが、学生たちに与えられた課題の一つだった。

３．授業のメモ

ノートに書かれた授業の時間割によると、教職に関する科目には教育法、教育史、教育原理、教授法、哲学、教科教育に関する科目には文学（国語に相当）、沖縄文化（歴史に相当）、英語、体育、数学、音楽、美術、作業、家政（女子部のみ[3]）があった。資料館の証言員（ひめゆり学徒）によると、時間割に名前がある教員 22 人のうち、元の女師・一高女の先生は５人（大城知善、与那嶺松助、仲宗根政善、岸本幸安、名嘉山ツル）で、うち４人が学徒隊の引率教員だった。元の女師付属小学校の先生も２人（平敷善徳、大山盛幸）いた。

１月 23 日の渡嘉敷真睦先生の授業（教授法）では、「・学級たん任をして真先に作るのは座席表である／・教育動作の第一歩は姓名を覚える事である（カルタ並べの方でおぼえる）」など、学級を受け持ったときに最初に行うべきことを教わっている。さらに、「しらみを取る場合／・学年を考へ又級長から取りそれでも恥しがったら浜にでも連れていって先生自身の頭からつき出して後で児童の頭に手を入れる」とある。子どもたちの頭からしらみを取る際の配慮について説明している。なお、先生自身の頭にもしらみがいるのが当たり前だった。

文教学校では、自由や個性といった民主主義的な内容が重視された。それを裏付けるように、「ほんとうの自由とは責任であり叡知である。」（2 月 7 日朝会の校長訓話）、「個性、各々がもっている個性を発展させること、そして科学的でなければならない　欧米的精神を学ばねばならない」（日時不明）というメモが残っている。

話者は不明であるが、「軍国的教育とは何ぞや／軍部の指導の下に軍部のやうきゅう〔要求〕する定員をつくるといふことが内容である　いい時もあるが悪い時もある／軍閥の専制政治によって狂信的精神をもった青年をつくるという事である　秘密主義、沖縄敗戦になるまで教へず、盲目的狂信的青年を作る。」と、「軍国的教育」への批判も始まっていたようである。

おわりに

３月 11 日、戦後初の八重山行きの船が出ることになり、学校側の配慮で、宮良さんたち八重山出身者は卒業式の５日前に文教学校を旅立った。石垣に帰郷した宮良さんは、４月から登野城小学校で教員生活を始めることになった。その時期のノートに、仲宗根政善先生が詠んだ句が書き写されている。それは、教員として新たな人生を踏み出す教え子たちへのメッセージであった。

なき友のみたまとともに　さきいでよ
きよくけだけき　ひめゆりの花

（学芸員　古賀徳子）

※１「宮良さんが自宅押入れの奥から取り出してきたポケット・サイズのノート（90 ページ・横ケイ線入り、米国政府印刷局制作）を見せてもらった。（略）講義中の先生のことばか、あるいはそれに対する宮良さん自身の考え・感想かが、必ずしも明確でないものもあるが、みづから心に銘じて記したメモであることは確かといえよう。」（土岐氏）

※２　ひめゆり平和祈念資料館編『生き残ったひめゆり学徒たち―収容所から帰郷へ―』2012 年

※３　沖縄文教学校ふみの会編『沖縄文教学校ふみの会・会誌』1998 年

※■■は判読不能。〔　〕は編集で補った。

仲宗根政善日記抄 (49)

〔1980 年〕三月二十四日

照屋秀夫兄

先日、名護に宮城桃郁氏を訪ねた。奈良の住宅が完成するまではというので、夫妻で故郷の地で静養しておられる。地つづきの島にいながら、一度もお訪ねしないでいるのが申訳なく思ったからである。

お訪ねして、顔を合わせると、不思議なこともあるものだ。昨夜、貴方と安里源秀さんの夢をまざまざと見たのだ。虫のしらせというものはあると、しきりに夢の話をされた。

田端一村氏の回想録が出版されて、首里高校で追悼会を催したとき、宮城氏は、わざわざ奈良から駆けつけてこられた。ちょうど安里源秀氏と隣り合わせて坐られた。田端一村・宮城桃郁・安里源秀・照屋秀夫・田港朝明等は、学生時代、東京小石川にあった明正塾でいっしょだった。

田端氏の霊前にぬかづきながら、安里・宮城両氏は、照屋氏のことを思い浮べ、何とかしてあげねばと話し合った。その後二人は、奈良と沖縄に遠く離れ住んで、打ちあわせることもなくすぎた。

宮城氏の昨夜の夢の中に照屋氏があらわれたのである。先日も団体の中に加わり、屋我地を廻ったとき、懐に香典を用意して行きながら、とうとう遺家族を訪ねることが出来なかったと言っておられた。

私ははっと胸に来た。照屋兄ともっとも親しく、もっともそのご恩を蒙っているのは私である。中学のときは同じ下宿にいて、勉強家だった兄にはげまされた。高校へ入学出来たのも、兄の感化、激励によったのである。福岡高校在学のとき、兄は熊本師範に奉職しておられて、水前寺の近くの下宿に訪ねて行ったことがあった。名古屋の愛知師範に移られて後も訪ねて行ったりもした。

女子師範一高女で、いっしょに勤めるようになって、家も近く、まるで兄弟のようなつき合いをして来たのである。子供たちも互に親しみ、わが家のように遊び親しんでいた。

付属主事も、私は兄の後をついだのであった。付属には兄のやりとげた功績が残っていた。私はただそれを受けつぐだけで、これという仕事もなしえなかった。

毎朝、主事室からマイクを通じ、全学童に、「オハヨウゴザイマス」というのが付属のならわしであった。全学童が、教室で坐禅をくみしんとしているところへ、各教室に配置してある放送施設を通じて主事は、「オハヨウゴザイマス」と朝のあいさつをするのである。すると、全学童が一斉に主事にこたえて元気よくオハヨウゴザイマスというのである。朝のさわやかな空気の中であの声を聞くのはこころよいことであった。

兄は、「オハヨウゴザイマス」とたったこれだけのことをいうために、ずいぶん修行をされたと聞かされて感銘した。わずか「オハヨウゴザイマス」という簡単なことばの中にも無限の思いがこめられるのである。一という字に、書家たちが苦心するように、照屋兄は「オハヨウゴザイマス」の一語に、自らの精神の粋をこめようと努力されたのである。真実一路の兄の生き方を示すものとして忘れがたい。大学で国語学の講義のとき、langue と parole〔ラングとパロール、言語学の用語〕の説明に、いくたび照屋兄のこの話をしたかわからない。一つには照屋兄を学生に知ってもらうためもあった。

戦争がはじまろうとした頃、兄は家族を鹿児島のいずみに疎開させた。家族の出て行ったあとのちらかされた部屋でいかにもさびしそうにしていた兄の顔を思い出す。疎開船の出るたびに、桟橋まで出かけて、手紙や小包を疎開して行く人々にことづけていた。

戦争がはじまったとき、どういう理由だったのか、兄は陸軍病院の勤務にはつかず、野田校長との連絡役に廻っておられた。西岡部長とはあまり気心があわなかったためだったかもしれなかった。最初、生徒を引率するのは、西平英夫・岸本幸安・平良松四郎・仲栄間助八の四名にきまっていたのである。

照屋兄は、家族も疎開させているし、上席でもあり、深く責任を感じていたので、学校からはなれるわけにはいかなかったであろう。それで、自ら野田校長との連絡係となり、南風原陸軍病院と勤務の生徒とは、直接のつながりは持っていなかった。一人ほっぽり出されたようなかっこうでもあった。

南風原陸軍病院は五月二十五日に、島尻南部へ移動した。第一外科の一隊は、波平前方丘陵の二つの壕に分れて避難していた。砲弾もやみ、飛行機も去ったある夕暮、私は壕を出て、伊原の部落にいた。どの家にも、傷病兵がよれよれの服をまとってとまっていた。その中に照屋兄の姿を見つけたのである。首里から、どのようにして、ここまで辿って来られたのかわからなかった。何か寂しそうであった。私はぜひ、壕の生徒といっしょになるようにすすめた。それから波平の壕で、解散の日までずっといっしょであった。私はアミーバ〔赤痢〕にかかり、高熱を出して壕の奥に寝てばかりいた。その間兄は生徒を指揮監督して、夜おそく水汲みに行ったり、遠く国吉まで米はこびにも行ってもらった。敵兵が近づくにつれて、炊事は極めて危険な仕事であった。壕のそとにかまを造って、そこで飯をたいた。火が消えそうになると、壕からかけ出てつぎたすのである。その危険は火つけの役の最後をつとめたのは照屋兄であった。

六月十八日の晩、いよいよ波平の壕を脱出して、伊原第一外科に移動した。その晩、陸軍病院から、生徒は解散し、兵隊は各自、適当な場所で戦闘配置につけとの命令が出た。壕の奥の重傷患者を寝かせてあるところで私は、生徒に解散命令を伝えた。皆は壕にとどまる方がよいか、弾雨の中に飛び出て行く方がよいのか決しかねた。出ようか出まいかと壕の入口にまるで地獄の入口の死人の群のようにひしめいていた。しかし次第に意を決して三三五五群れ立って生徒たちは壕を出て行った。重傷を負うた患者とわずかの者が残っていた。二三日前、甥の岸本本秀君が照屋兄を訪ねて来ていた。彼は憲兵で、戦場の様子を心得ていた。解散になった喜屋武に来るようにとの連絡があったらしい。照屋兄大城兄にはげまされて、私もいっしょに出た。アミーバー赤痢で高熱にうなされていた私は、やや熱はとれていたものの足がふらついた。壕を脱出して、伊原部落の前の道路に出ようとしたとき、照明弾はつぎつぎとあがり、道路には、避難民や兵隊が右往左往していた。しばらく岩のそばで（現在第一外科壕の標識が建っている）様子をうかがっていた。意を決して三名は、道路に飛び出た。死体が至るところにごろごろしていた。しばらくすすむと、家族づれにあった。喜屋武方面に行きたいが状況はどうかと尋ねると、いや喜屋武も敵兵が近づいて、それでわれわれはこちらへ来たのだという。もう東も西もない。向っている方向へすすもうと歩き出した、とき　家族づれの上に砲弾がおちて、三名も爆風でぶっ倒れた。意識がもうろうとして次第に消えて行く。まるでほたる火のように妻子や親の顔が浮ぶ。南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏とたしか三度となえて、ぱったり意識を失って地上に伏してしまった。しばらくして、照屋兄が仲宗根と呼んでいる声が聞えた。その時、はじめて自分がまだ生きていることを知った。首に手をあてるとぬらぬらと血が流れていた。生きることが出来るであろうか。やっと照屋兄に手をとられて立った。照屋兄も大城兄もともに負傷していた。照屋兄がていねいに繃帯をまいてくれた。

大城兄が、もう壕に引返そうと言い出した。三名は血だらけになって壕にひっかえした。まだ残っていた生徒たちが、先生方が負傷したといって心配そうにとりまいた。私は岩かげにいた比嘉診療主任にみてもらった。彼は親切に傷口にふれながら、大したことはないよと元気づけてくれた。この壕にとどまることは危険だと感じたので、もう一度出ましょうと、今度は私がさそうと二人とも返事してくれなかった。照屋兄は血だらけになって鉄兜をかぶったまま入口の岩のそばに坐っていた。もう一度さそったが、頭をふった。後髪をひかれながら壕を出て入口に出た。夜はしらじらと明けようとして、三三五五生徒たちは散って行く。死の彷徨をつづけて行くのである。どうぞ

親元に帰りつくことが出来ますようにと、その後姿に手を合せた。しかし、ほとんどはそのまま消息をたってしまったのであった。〔続く〕

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。
旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。
※〔　　〕は編集で補った。

本　棚

元琉球大学教授　仲程昌徳

『戦時下の学童たち　那覇高六期生「戦争」体験記』

1953（昭和28）年の那覇高等学校卒業生は、いわゆる「6期生」と呼ばれるが、1945年の沖縄戦当時、彼等・彼女たちの多くは、国民学校4年生であった。彼等・彼女たちの多くは、というのは、戦後の学制改革やその他の事情で、同学年生ではあっても同年ではなく、年齢がまちまちだということによるが、いずれにせよ、彼等・彼女たちが「学童集団疎開」対象者であったのはかわりない。それゆえ、本書は「疎開」と関わる体験談が多く見られるのが特徴となっている、といっていいだろう。

「沖縄県学童集団疎開準備要項」によると、学童集団疎開「対象者は初等科3～6年までの男児を原則」としたということである。しかし本書に収められた「「対馬丸」にまつわる」章（3編うち1編は6期生の兄の手記）及び「本土学童疎開の想い出」の章（6編）そしてその他の「疎開者」たちの性別を見ると、必ずしも「原則」通りではなかったことがわかる。それは「対馬丸遭難学童名簿」（大城立裕「対馬丸」）を見るとさらによくわかるが、「6期生」に関して言えば、彼等、彼女たちは、「学童疎開」組のなかでもさらに年少組であったし「内地に行ったら、汽車に乗れる。雪が見られる」（上原健秀「宮崎県への集団疎開」といったように、旅行気分で船に乗って行ったのも無理からぬことであった。

「学童集団疎開」対象者でありながら「疎開」できなかった者のなかには、「こんな小さな娘を危険な海へ一人では行かせられない。死なば諸共」（吉浜政子「＜遺稿＞戦火を逃れて」）だとして祖母の反対にあって沖縄にとどまったのもいる。彼女のように、県外へ「疎開」できなかったものは、それぞれに県内への「避難」を余儀なくされる。

ここに収められた体験談は、「疎開」組、「避難」組そして「外地」組とでもいえる、いわゆる海外で戦争を体験した組の三つに大きく分けられるように、広い地域にわたる体験談を収めているが、その大きな柱をなしているのは、1944年10月10日の大空襲である。それは那覇大空襲とも言われているように、那覇市を灰燼にした空襲であるが、「6期生」たちのほとんどが那覇近郊の国民学校に通っていたことから、身近で大空襲を体験することになったのである。その時、彼等、彼女たちは、それぞれの家族壕に避難するが、それがほとんど役に立たないことを知っただけでなく、身を以て戦争の恐ろしさを知ることになる。そして逃避行で被弾し、藻掻き苦しむ人々を目撃し、「神様お願い手足を千切らないで、一気に死ねます様に」（玉木利枝子「南部激戦の中で」）といったのが唯一の願いとなっていく。

10・10空襲後の「6期生」の体験談のなかには、これまで知ることのなかった出来事が幾つも出てくる。その一つに桑江義直の「私の戦争体験（慶良間・屋嘉比島）」がある。鉱山の坑道を避難場所にした日々の出来事は、痛切極まりないものがあり、これまで語られることなく胸臆に秘されていたように思えるものだが、「兄が白旗を持って先頭に立って下りて行った」姿は、いつまでも消えることのない印象を残すものとなっている。

「6期生」が、60数年たって戦争体験談を残そうと思ったのは名城郁子の「発刊にあたって」に尽くされているが、そこには間違いなく「七年生の時の担任」であった、本村つる（旧姓佐久川）の影響があったことが窺われる。

それは「当時の先生に、佐久川つる（前ひめゆり平和祈念資料館長、現ひめゆり同窓会理事長・本村つる）先生がいらした。ひめゆり学徒隊員で、艦砲射撃の嵐の中を従軍看護兵として参戦し、九死に一生を得てきた体験談を話してくださった。若くて情熱的で、生徒からは尊敬され、親しまれ、教室はいつも和やかだった。先生の一語一句を聞き逃すまいと、充実した授業だった」（大城佳子「宮崎から熊本へ」）といった言葉が、他の体験談にもみられることから推測されるのだが、佐久川つるの「授業」が、「6期生」の体験談へと繋がっていったことは疑えない。

「七年生」は、新制度になって中学一年生になるが、同時期に受けた影響の大きさがいかに大きなものであったかがわかる。戦争体験の継承は、そのようにしてなされていくものだということを得心させるものがあった。

声

不戦の誓いを新たにし、平和を希求したい

千葉県　80 代　男性

前略　ごめんください。

昨年十二月八日、観光旅行で沖縄を訪れ、ひめゆり平和祈念資料館で、新崎さんの説明をお聞きしました。じっくりと長くお聞きしたかったのですが、時間の都合でわずかの時間でした。それでも、学徒の皆さんをはじめ県民の方々が恐怖の中で次次と死んでいった話をお聞きし、本当に体験者でなければ分らない、震いを感じました。しかも証言者が、私と同年とお聞きし、感銘を受け、思わず、握手してお名前をお聞きした次第です。

新しい年を迎え、私もなお一層不戦の誓いを新たにし、平和を希求することに情熱を燃やす心算です。

新崎さん達の運動にいささかなりとも協力したいと思い、私の気持を同封いたしました。

どうぞお身体に気をつけながら、命ある限り頑張って下さい。

ひめゆりの塔

ひめゆりの塔にぬかづき献花する　胸迫りきて涙のにじむ
十五から十九までの女生徒ら　壕病棟で看護にあたる
ひめゆりの遺影の並ぶ展示室　まなざし伏せて通り過ぎゆく
重患を残し看護の仲間たち　解散令で闇夜さまよう
ひめゆりの資料館にて同年の　生き証人と固く握手す

資料館の動き（2013 年度）

2013年 4 月22日	証言員以外のひめゆり学徒への聞き取り調査開始
29日～ 5 月11日	琉球大学考古学研究室との合同による伊原第一外科壕の発掘調査
6 月23日	第 68 回ひめゆりの塔慰霊祭
7 月24日	アニメ「ひめゆり」一般公開イベント「ひめゆりからの伝言」
8 月 2 日～11日	夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」
9 月28日	館外講話事業への講師（証言員）派遣を終了
10月 7 ・ 8 日	第 20 回日本平和博物館会議に出席
12月16日	2013 年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」オープン
2014年 1 月15日	沖縄大学地域研究所へのヒアリング調査
20日	2013 年度ひめゆりガイド講習会（ボランティアガイド・学生ガイド対象）
23日	沖縄国際大学南島文化研究所へのヒアリング調査
2 月 7 日	2013 年度ひめゆりガイド講習会（バスガイド・タクシー乗務員対象）
20日	琉球大学沖縄国際研究所へのヒアリング調査
3 月10日	開館 25 周年特別展上映用ビデオ制作のための撮影開始
19日	沖縄県教育委員会により登録博物館に認定される

資料館ガイド

◆平和講話・証言ビデオ「平和への祈り」視聴ご案内

多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話（約 30 ～ 45 分）や証言ビデオ（25 分）、アニメ「ひめゆり」（30 分）を視聴することができます。※ご予約が必要です。（20 名以上の資料館見学団体対象）

【講　話】 10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00

【ビデオ】 9：10　10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00　16：00

※毎週月曜日・年末年始（12 月 30 日、31 日、1 月 1 日～ 3 日）・旧盆（旧暦 7 月 13 日～ 16 日）は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6 月 21 日～ 24 日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

●最大収容人員：200 人（席）

●資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。

●ホールは講話･ビデオ以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

●予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせていただくこともございます。

◆ＶＴＲ室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。

◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25 分）

◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30 分）

◇「ひめゆりの戦後」（33 分）

◇「戦火に消えた 21 の学園」（26 分）

◇アニメ「ひめゆり」（30 分）

多目的ホール

◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前 9 時～午後 5 時（閉館は午後 5 時 25 分）

②休 館 日　年中無休

③入 館 料　大人￥310　高校生￥210　小・中学生￥110

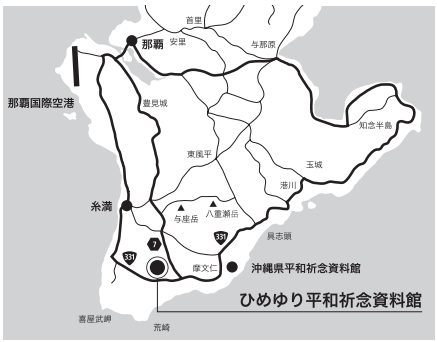
団体料金（20 名以上）　大人￥280　高校生￥190　小・中学生￥100

④交　　通

【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89〕で約 30 分、糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約 4 分、赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89〕に乗車し、約 20 分。糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え、約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約 30 分



ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第 53 号

2014(平成 26)年 5 月31 日発行

編集・発行　公益財団法人　沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立　ひめゆり平和祈念資料館

資料館　〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1　☎ 098-997-2100

URL　http://www.himeyuri.or.jp/